

テキストでの学習に関して

本書は気象予報士試験の出題範囲のうち「予報業務に関する一般知識」の内容に従って構成されています。その内容は、気象とは何か、雨や雪はどのように生まれるのか、風はどうやって吹いているのかなど、主に気象の成り立ちに関係するものです。なかには計算式が出てくる項目もありますが、重要な計算式はそれほど多くありません。苦手な方も、その計算式が表す内容を文章や図などのイメージを活用して読み解いていって下さい。また、専門的な用語については解説を加えていますので、その内容を確認しながら読み進めて下さい。

なお、関係した項目や少し進んだ内容を示すために、補足説明を加えている部分もありますので、理解度に応じて活用して下さい。

学習の進め方

「予報業務に関する一般知識」は取り扱う範囲が広いので、特に初めて気象について勉強する方は、長期的な計画を立てて学習に臨みましょう。気象予報士試験は1月末頃と8月末頃に行われますので、そこまでどれくらい時間があるかを考え、各テキスト、各章に割り当てられる時間の目安を考えてみて下さい。また、「予報業務に関する一般知識」では「気温・湿度と大気の状態」や「大気の運動」の内容が難しく、理解に時間がかかりますので、余裕のある学習計画を立てることが重要です。

本書は9章で構成されていますが、章によって内容の幅に違いがあります。また、ページ数が少ない章ほど簡単ということでもありません。

まずテキストまたは一章分の内容を一通り読んで概要をつかみ、次に各章の細分項目を読み込んで理解を深めて下さい。そして、理解が進んできたところでチェックテストを行い、理解できていない内容や苦手な項目を見つけて復習を行って下さい。

なお、「予報業務に関する一般知識」では気象業務法等の法規・法令に関する問題も出題されますが、法規・法令については最後にまとめてあります。本書を用いた学習計画を立てるときには、法規・法令について学習する時間も計画に組み入れておいて下さい。

テキストの内容と試験科目の対応

気象予報士試験では試験の科目が設定されていますが、科目の範囲を超えて出題される場合や、複数の範囲から1題が構成されている場合があります。それでも、複数の科目を横断的に学習するのは難しく、また効率も良くありませんので、本書の構成に従って学習を進めるのが理想的です。本書は試験科目と対応するように作成されていますが、若干の違いもありますので、学習計画を立てる際には本書の項目と試験科目との対応も参照しておいて下さい。

